

解題

藝苑談 一卷

清田 絢著

此書は、本叢書第六卷に收めたる藝苑譜と共に、著者が學術詩文に關する談を録したるものなり、并せ看ば發明する所多からん、但此書に於いては、當時學者の輕薄の風を規戒すること多しとす。

藝苑談序

むかし先大父坦庵先生、越國の聘に應じ、文學の職に命ぜられしより、先考これにつき、年々越路に往來あり、家兄また先考の業をうけ、ひとへに先考の時の如し、後舍弟君錦へ、別に既廩を給はり、家兄とかはるく、越國に赴き、或は東都にいたり、奉職今に怠らず、君錦もとより善病、去歲の冬は、ことになやめることありしが、去春より家兄東都の藩邸におはし、君錦家にある折なれば、心靜に痾をやしなひ、今春に至りて、やうく病より起ぬるも、たゞこれ君恩のあり難きを願み思ふにつけ、徒に洛下に優游せんことは、素餐の恐れあればと、董子が帷を下すにはあらねど、ひたすら閉籠りて、此年ごろ其業をかばにて、かいやりをきし、反古どもを撰次し、これかれ稿を脱するもあれど、

家もとより餘財なければ、刮削のこと心にまかせず、猶待ことある中に、曾て小子へ業をさづけしちなみに語りきこへ、又は問に答へし事どもを、病中のすさびに、只其まゝの國字をもつて録し、藝苑談と名を命ぜし聊の冊子あるを、梓にちりはめ、同學にたよりせんと、受業の生徒の求めにまかするものから、余に請て其首に言あらしむ、いでや其書は、君錦の卮言なり、世人これをもつて君錦をはからんは、實に管豹の一斑なり、しかれども、其意の屬する所、至理の存するありて、余これに點頭せざることあたはず、其故いかにとなれば、此書に論ずるもの、すべて藝苑の緒餘にして、道德の説にあづかることなしといへども、せんずる所は、近時藝文を業とするものゝ、ひたすら輕薄に馳るを憂るにやあらん、然れども、これもまた氣運のしからし

むる所、世擧て教る人まなぶもの、皆ことごとくしかるを、君錦一人の力をもつて、其横流をとゞめ、頽波をさゝへんことは、まことに飛蚊の山を負とやらん、みつからはからざるの嘲りもさることながら、君錦においては、やむことを得ざるものあり、凡儒術文藝をもつて世に名ある人、少からずといへども、藩國につかえ、文學の職に任ずるあり、隱居して言を放にするあり、ふたつのもの、其勢ひ同じからず、さるにても、京師は學業に志ざすもの、諸國よりあつまる所と、むかしよりいへど、今其人をみるに、僧徒にあらざれば、醫家の子弟なり、かれもとより先王の道を尊信し、脩身齊家の益を求むるにあらず、又不朽の業に志ざし、藝苑の赤幟をたてんとにも非ず、釋典醫書、各其講師ありて、是に従て其説をきくいとま、僅に翰墨に指を染るに過

ず、されば其業をこふも、唐詩明詩李王が尺牘などの書に出ず、昨日門に上る者、今日告ずして郷里に歸り、或は朝に束脩を此にさゝげ、夕べに名刺を彼に投じ、或は一日の中に、業をあまたの先生に請もあり、まなぶ者すてに弟子の禮を守らねば、教る人又師道にそむく、學業の輕薄に馳る、其よる所なきにあらず、然れども、かの隱居して言を放にする類ひは、よしやともかくもありなん、諸藩文學の職にもあらん人の、是に雷同すべきにあらず、君錦既に祖考の遺業をうけ、越國の文學たること、こゝに年あり、なか其奉職の萬一を思はざらん、況や越國は大藩なり、大夫士より以下、百の吏職にいたり、其員いくばくなるをしらず、其子弟の君錦にしたがひ、業を受るもまた少からず、いかでか其授くる所をつゝしまざるべき、一薰一蕕、其化すると

ころ、猶年を経て没せずといへば、學術の輕薄、士風にあづかる
 ことなしといふべからず、されば其輕薄をいましむるは、他を
 戒むるにあらで、みづからいましむるなり、みづから戒むるは、
 其授くるところをつゝしむなり、是すなはち君錦奉職の志な
 るべし、余故に點頭して、此言を其はじめにしるす。

明和戊子孟夏

仲兄江邨綬君錫甫撰

藝苑談

越國文學播磨 清 絢 撰

文は道をつらぬくの器にして、儒者の末技にあらず、儒者の道、藝文を本とせざるはいふまでもなし、藝文に落るは歎くべし、さらばせめて藝文に力を用ゆべき事なるに、名聞を專にし、實業をつとめずば、藝文もまた塗炭に墮べし、市井賤價の雜貨、茶果などのうは包にも、關防名字の印を押し、兒童の啼を止るくさ、艸帚にも、文徵仲、董玄宰の書體にて、傍注簽題するなどを、文華の盛なると心得るは、笑ふべし、歎くべし、文房の具より衣服よろづの調度まで、唐土を真似て、是を學を好むと思へる人さへ多し、才學有て其名を得るは、手柄ともいふべし、唐土人のいへる、都都平丈我、及び、曳白同然の歎まで、虚名を街賣するは、笑ふべし、狡にして其術に巧なるは、駟僧の所爲に同じ、文はみちを貫くの器なれば、力を用て道をつらぬくの用をなすべし、文を學に三訣あり、主客を辨る、俗習を去る、輕薄を誠る、是を三要とす、

主客を辨へざれば意の顛倒、語の顛倒ある事を免かれず、古人は全句を全用しても、はめ所わるければ俗習となる、輕薄ともなる、書を讀ても要領を得る事ならず、可否を見分る事もあたはず、主客を辨るには、史記を熟讀するを要とす、史記にては、封禪書、本準書を最よろしとす、項羽本紀、曹相國世家、匈奴傳、青霍去病傳これに次ぐ、主客を辨れば、俗習を去り、輕薄を誠るとに便りあり、およそ主客を辨るといふことは、其書其句に隨て、正法あり、奇法あり、定法あり、活法あり、中々一を執ては論ぜられず、つとめ學ばゞ自然に識得すべきぞ。

俗習を去事も容易にならず、俗習とは世にいふ倭習の事ぞ、倭習とはいふべからず、俗習といふべし、俗習さらざれば、眞の文章にあらず、たとへば葛藤くわとうの粉のごとし、食用にはさしてかはらずとも、藥に入用るに、葛の代りに藤は用ひられず、葛藤の粉に精品麤品ありても、葛は葛、藤は藤ぞ、人に才不才あり、文に工拙あり、上手の名有ても、俗習をさらざれば、眞の文章にあらず、若し唐土人にみせば、笑を傳ふべし、人多くは通俗の言葉を俗習と思へり、通俗の言葉にも漢語あり、御用御書珍重、重疊、叮嚀、敷衍など、皆漢語ぞ、吳服物の赤地、青地などの類、女中といふ事なども、皆

漢語なるぞ、此内珍重女中は義は、吾國に用るとはかはる、其外は義もさしてかはりなし、此類擧てかぞへがたし、加様の類の字を用ふるを、俗習といふて笑ふは誤ぞ、是亦用ひ所にて、唐土の語も俗習となると知るべし。

主客を辨へ俗習を去ても、輕薄を誠めざれば、文は文なれども、道をつらぬくの用をばなさず、輕薄は甚だ多端にして、然も才子慧人も足を失ひ易し、其一二を擧ていはと、吾黨攘臂扼腕、側目睥睨など明七子輩の詩文に多く用るとて、吾國の人もこれを用るは輕薄ぞ、聖人の吾黨と仰せられしは、郷黨の黨にて、聖人の御在所をいふ、無偏無黨、君子不黨の黨にてはなし、朋黨徒黨は、吾國唐土ともに、上よりきびしき禁止なるを、一か二つには、吾徒黨の者共といふ事、よろしからず、攘臂扼腕は、閨里惡少のすがたにて、吾輩さへなす事に非ず、貴人はいふにも及ばず、然るに貴人の詩文に是等の字あり、唯七子體を學ぶに心有て、氣付給ぬなるべし、側目睥睨は、人もおほく知りいゝ立らるゝ事ならば、その知たる人とはいふ義もあるべきが、妄に下すべき字にあらず、ましてさやうな仕合に逢ざる人の、いふべき事にあらず、七子などのいふもよろしからねど、彼輩はその實を以ていふなればまだし

もぞまづ唐土人は、漢以後は、世襲門蔭入貨、其外にも出身の路もあれども、十が九はたゞ人より徴用せられ、殊更隋以後は、進士といふ事始り、たゞ人より及第して、將相の任三公の位にもいたる、官をやめ郷里へ歸れば、もとのたゞ人ぞ、吾國歴世の貴人とは、同日の論にあらず、其上唐土人は、事のなき時も、義氣慷慨の談には、扼腕していふ事、ふう俗とみゆ、李王なども、及第せざる時の文にも、扼腕の語あり、既に任官したる後は、王元美は時相嚴嵩に忤ひ、楊椒山、事にて、倍其怒を激し、終に父を死地に入る、徐子與、吳明卿も、椒山が事、根となつて、貶官せらる、明卿は、畢節衛の邊まで行たり、畢節は京師の東南七千餘里の夷境に在り、李于鱗も、嚴嵩が稱譽する、王唐二子の文を排撃す、其外の社友同志皆是に同して、時の權貴を仇とす、因て或は官路を妨られ、さほどになきも、皆側目、睥睨に逢ふ、加様に彼輩は身上にかゝる事ゆゑに、同社會集しては、攘臂扼腕もすべし、時の貴要并にそれに阿諛する人に對して、同社を吾黨といふ、さすればいよ／＼人の側目、睥睨に逢ふ、七子などといへるは、右のとほりにて、實ある事ぞ、それさへ詩文にいふは、よろしからず、まして吾國太平の御代に生れ、貴賤ともに仁聖の政化を仰ぎ、娛しむ、何の攘臂扼腕す

る事やある、側目、睥睨に逢ふ事いさゝかもなし、平生親昵する友にてもなく、唯時節に宴會し、其席散じては、路人同然の交なるをも、吾黨といふ、書生仲間、師家の講席にて、面を見おぼへたるまでの輩まで、吾黨々々といふこと、輕薄にあらずや。

あよそ詩文に用ゐる文字、唐土にて常に用ゐる字にても、用ひられぬと、むさと用まじきとあり、浮名、名途、散髮、官遊、四方の志などは、用ゆべからず、浮名、散髮などは、吾國にはなき事ぞ、虛名とはいふとも、浮名とは決していふべからず、把臂、把袂、悲歌、壯遊などは、むさと用ひまじきぞ、風塵、天地は、歷下が、隔日瘡といへり、百年、萬里、黃金、紫氣などもこれに同じ、風塵には、數義あり、ともに目出度事にてなし、用ゆべからず、風塵の外は、用てもさして苦しからず、意の輕薄にならざるゆえぞ、是等の事は、才子達はいはずとも、合點たるべけれども、常にいゝなれて氣が付ねば、吾眉睫を見ぬ同然にて有べし、今にはかに吾いふ所を聞て、定て大に笑ひ怪まるべし、猶詳にいゝのぶべけれど、餘り事長ければ略す、なじりとふ人あらば、逐一明白にいゝのぶべし、

文はほし、蕪ほし、大根の如くに作るべし、煎餅の如くにすべからず、排比、鋪陳はあ

のづから輕薄を生じと知るべし、其上排比鋪陳に過ては本意を取失ふ事多し、虎よりは龍強し、龍よりは雲、雲よりは風、風よりは垣、垣よりは鼠、と段々にいふて猫を鼠猫と名づけしといふ事、秘笈にいづ、米芾が聖人の贊に、聖人を十迄連呼したり、蝶狎にして不敬甚し、金の粘沒喝、中國へ打入し時、軍士の中に聖人の御墓を掘かへさんといふし者あり、粘沒喝、通事高慶裔に問て曰、孔子とはなに人ぞ、高慶裔が曰、古今大聖人、粘沒喝が曰、古今大聖人ならば、其墓をば掘かへすべからずと、凡そ、古今の聖贊、此一句の外にいはず、排比鋪陳の無益なる事、右にても知るべし。

董廣川の弟子呂步舒、其師の文を知らずして下愚とす、廣川、是が爲に死に坐せんとせし、廣川の恥に非ず、步舒が恥にて、且その罪甚し、古の儒者は、大方一經を專業とす、後世の儒者、鶻突羹同然なるとは、同日の論にあらず、師弟の交も、後世とは雲泥違たるぞ、步舒其師の議論文體をも見知らざるは、恥甚し、恐らくは左にはあらず、けだし主父偃が意をむかへていふたるなるべし、あよそ古より冤屈誣枉、十が九は、風をうけ意をむかふる中より生ず、其たすけをなすものは、輕はくなるぞ。

詩文計にあらず、名字又は堂室の名、書籍の名までも、心をつけて輕薄にならぬ様

にすべし、明末の李漁は、無賴とるにたらぬ人なるが、其人たるをしらぬ先に、其文集を披閱して、既に其君子ならざるをしる、文集を一家言といふ、湖上李漁笠翁撰とあり、地名人名表字連屬して風雅めきたり、大儒君子の所爲にあらざ、廣東新語といふ書名にて、扇翁山が人がらは知れねど、寄園寄所寄といふ書名にて、趙恆夫は方正人にてあるまじと思はる、もし其人方正人ならば、書名にて其徳を掩ふ事惜むべし、蓋し書名の輕薄なる、金樓子、酉陽雜俎、白獺髓、碧雲暇、鶴林玉露の諸書漢より後、世々あり、いつの時にしても輕はくをまぬかれず、必是に效はざるべし、姓名の奇僻なるは、屋破引光、馬上言、高如雲、五十九、大鵬翼、王者佐、猛如虎、席上珍、七十六など、奇僻とはいふべし、輕薄にはあらず、右九人世のいふ異名にあらず、共に正史に出、秦の大將に孔子といふものあり、是は輕薄とも罪人ともいふべし。

吾國の所謂訓點といふものも、心を用ゆべし、昔菅江の諸公精力を費して仕立給ふ、容易の事にあらず、今の人は唯兒童讀書の筈歸と思ふ、字士新力を此に用ゆ、志は美とすべし、但し譯を以て訓點とし、俚俗のことば多く、且其功少し、太宰徳夫、倭讀要領を撰す、是は訓點は奇怪ならねど、其主とする處、主客を辨るにあらず、其

を得て其二を得ざる事おほし、是亦功少し。

吾國のかな文は、われはまだ學ばず、唯達意ばかりにする假名がさの書は、通ぞくのことばにて書がよし、もし又正字を書ならば、傍に音又は讀を付るは苦しからず、音讀のかはりに、傍に譯をつくるはよろしからず、又所謂假名文のことばをも用ゆべからず、こしかた、おふかた、何くれ、こゝら、かけまくの類、其外甚多し、枕詞をも用ゆべからず、假名文は、其人にたよつて學ぶべし、學ばずして片はしを聞はつり見覺たるを、ところまだらに書入たる見にくし、漢文を假名書にしたるやうなる書に、假名文の所々にまじりたる書を、われ戯に山海經となづく、山海經の圖に、人とも鳥獸とも定められぬものおほし、今の假名書の書籍、過半は是におなじ。書を撰べるに、心をつけざれば、けいはくに入る事多し、無病なる時仕立たるをも、病中手透なるに因て作るといふ事、儒生の套語にて、唐土人もいふ、其意自から尊大にするにあり、是も輕はくの一つぞ、其上今は套語となつて、信ずる人なし、無益の事ぞ。

書を撰ずるに、本より心にある事は、語脈貫通し、條理暢達す、にはかに作たるは、自

言相違、鑿說牽強、謬甚多し、此病は高名なる人に多し、多年胸中に貯たる成書を、稿をかゆる事も度々にて、梓行して世に行はるれば、其子弟門人などすゝめて、また一書を撰せしめ、或は古書の注を仕なをさしむ、曾中に成書なきを、一旦に仕立てるなれば、右にいふ通りのはづぞ、古書の注を仕なをすも、十が八九は舊説に同じけれど、さありては仕なをしたる詮なきによつて無理に新奇の説をなす、よかるべきはづなし、是によつて卻て前功をそんじ、謗を得るには至る、慎むべし。

一書を撰し、其中へ外に撰する書名を引用る事、昔はともあれ、今は宜しからず、既に稿を脱したる書にても、名を銜ふ嫌有り、いまだ稿を脱せざる書、或は纔に艸を起せる書、其甚しきは、いまだ艸をも起さざるをも、書のせ置くは、撰述おほきの名を食ると、後に梓行する時の先容をなすに過ぎ、もし又同書の中兩所に出たる事をば、一所をば略して、事はなにがしの條下にいづとかくは、一詳一略にて、作文の正法ぞ、史記其外諸書にも多し、右にいふ他の書名を書のせ置とは、大に違たる事ぞ、また先達て梓行せし書に有る事を、今版する書にいふて、事はなにがしの書にいづとかくはくるしからず。

吾國の昔の文臣武將などの事を、詩に詠じ文に記するはしづくり、戲或は漫の字などを置し人あり、ひが事ぞもし是を戲とせば、宮怨、閨情、採蓮、塞上、塞下の諸題は、何の用をなすや、但し優戯に出たる事は、努々つくるまじきぞ。

風雅は尙ぶべし、假の風雅は賤むべし、風雅を假飾して、卻て風雅を失ふ事、宋以來の詩文に多し、笑ふべきあり、にくむべきあり、鶴を友とする、離騷を讀む、道書に點ずる、香を焚く、雪を敲て茶を煮る、侍兒をして花に澆しむる、燈下に書を讀て、几の左右に酒榼と如意とを置いて、快意の事にあへば、一大盃をあげ、痛嘆の事にあへば如意を以て几を敲て長嘆する、妻妾と花の甲乙を評論する、この類を詩文に用ゆれば、直に輕薄となる、汪三儂が五喜の一つに、正午の花色をよるこぶとあり、花色の愛すべき、何ぞ午前午後を論ぜんや、花の香は暮に甚し、花の清さは曉にあり、殘夜の月色、曉天の雪色を喜ぶとあり、夜も曉も既にいふたるに因て、やむ事を得ず、正午の花色といふたるなるべし、それほどにしても風雅と思はれんとするは、かなしき心ならずや。

内に寄る詩は古より有り、婦人の字を識たるは、末の世に彌多し、妻妾と詩文の贈

答する、雅事にあらざるではなし、梓行して世に廣め、鼻高く自負するはけい薄ぞ、韓退之蘇子瞻も寵妓あり、韓の趙に使する、蘇の徐に守たる、忠勇類ひ少し、又ともに文章の主盟たり、二公所昵有るを以て、その名節を損ぜず、二公所昵を人にひけらし、詩文に毎々載録せず、陶元亮杜子美は、詩語妻子に及ぶもの多し、露ばかりも猥褻の情狀なし、李漁が華山へ登れるに、韓公の慟哭せられしといふ所まで、婢妾をつれ行たる事を、文に作て甚しく誇示す、又其二妾の死たるに、七言律詩二十首をつくり、自注を加へ、猥褻をきはむ、是等は風雅所てはなく、俗惡甚し、およそ宋後の人、口くせにも雅々といふ、雅といふ事を知らざれば、雅の字をしらぬに同じ、其二三をあげていはゞ、爾雅詩の二雅、子の雅言する所、雅樂、雅素など、又雅は正ともあり、吾國にて雅をまさるとよむ、もとよりとも讀む、雅の字義是等にても考へしるべし、然るを氣隨、我儘無禮、不行義、異風、異相なるを雅と心得る、はなはだしき相違ひが事ぞ、詩人の雅なるは陶元亮杜子美の上に出る者なし、二人の詩に、彼所謂雅事は少しもなし、然ども一點の俗氣、俗習なし、眞の雅といふべし。

清人は明人に比すれば、其品また下る、輕薄の風は、明より盛になるといへども、清

にいたつて又一種奇怪の弊風始りて、廉恥の道全く失る、寄園寄所寄、香祖筆記、廣東新語の三書は、博物の助にもなつて、面白き書なれども、駟僮の仕方甚しく、輕薄いふに及ばず、寄所寄の作者趙恆夫は、山西交山の賊を平げたる事あり、それを寄所寄中に、一字を低して間配りて數段に書たり、香祖筆記には、某官某公予にかたりていふ、其許のなにの作は甚だよろし、かやうくの所中々世人の及ばれぬ事と、手辭謝してこれに當らず、某官某君のいふ、先生某の詩は妙境といふべし、うはべはかくいふて、微意は加様の事ならんか、古へにも愧ずといふべしと、予當らざれども、竊に知音に擬すと、文句は異同ありても、本旨はいつもこの通りぞ、廣東新語は、廣東全省中の萬の事物を擧て、此事をなにといふ、予が詩に所謂なにくがこれじや、これをかくいふ、予が詩になにくといふがそれじやと、過半は其自作の詩を引て證とす、大方一句或は二句を擧たり、その言を信ぜずば、其詩をも信ぜまじ、其言を信ぜれば、詩を引て證とするに及ばず、古人の詩文を引て、其言の證とするは、古より多し、尤其理あり、わが詩をわが言の證とする、第一其理なし、且其例なし、右三書の仕方はかはれども、其心根のむさくけがらはしき事は、三書ともに

かはりなし、これらの風いまだ吾國へ吹傳へず、牖戸を綯繆し、預め其防をなさば宜しかるべし、われ童子の時、北野の菅廟にて、何やらん聡ともせぬ糖果を賣者の店をかざるを見るに、錢を三四千藤匣より取出し、七八文ほどつゝ數箇所にならべ置、餘錢をば一大堆となしたり、從奴が曰、あれは人既に多く買求めたる體をなしたるにて候、多くの人買求る上は、妄りなるものにては有まじと、跡より來る人に思はせるためにこしらへ、鳥をとる罟と同じ、あれをば錢の罟とも申べしといふし、右にいふ三書の仕方、彼の糖果を賣る者に同じ、彼はいふに足らず、儒生などこれをなすは、憎むべし、賤むべし。

或人の書きたる繼橋の記に、左傳の句を引てけい薄なるを、仲氏捧腹せらる、それによつて思ひいだせり、或書生の書たる熊坂の記事に、把^ツ炬^ツ而門^ス焉といふ句あり、又或人實盛の記事を書たるに、全首左傳を真似て、その中に、組焉といふ二字の句あり、讀めず、其人に問へば、くめよといふ事といへり、是は又一段うは手ぞ、左傳國語むさと讀さくものにてなし、越中の芳野杏仙といふ人、學を好て、輕薄の恥べきを知る、猶又輕薄を誡る事を問ふ、われ答へていふ、左傳を常に讀て、左傳を用ざる

も、輕薄を誡る一ツといふべし、一偏なるいゝかたなれども、今日にして助益ありといゝしは、右の類によつての事ぞ。

假名書の書を撰するに、通俗の言葉を用ゆるがよろしきは、上にいゝしとをりぞ、通ぞくのことばの中にも、賤しくふつゝかなること葉は、なるだけははぶくつけれど、それよりは慧便けいはくのことばを禁ずべし、預めといふを兼々といふ、なすべき事なるといふを、するはづじやといふの類ひ、ふつゝかなれども、さして害なし、慧便輕はくの言葉は、人をして笑を催さしむる事あれども、其さまいやくして、世人のいふ人體をそこなふ、世にいふ口あいなどの類ひ尤誡むべし、漢文にも誡るは同じ、心の付所は右に同じ。

世人の言葉に人たいに似合ぬ、人體がそこねるといふ語あり、詩文をつくるに此語をよく守れば、自然と輕薄少し、又纔に詩文を作れば、不朽不朽といふ、不朽は身後の名ならずや、今の人は不朽を惡む者多し、身後の名よりも、せめて半生もたるるやうにありたし、婦女の首飾衣類の物ずきにあなじく、はやるとさへいへば、仕なをし仕直して頰を憚からざるはけいはく甚し、少壯阨窮の時作りたるを、老境

達時に見ても、恥しからぬ様にありたし、詩の題も、節序山水雪月花の類は、貴賤窮達老少によらず、其人其時に隨て作られてよし、雄飲豪飲散髮悲歌など、用ると用ざると、こゝに於て得失考へ知るべし。

文章を書に、字句の上は俗習を誡て、事は吾國の掟を守るべし、地名官名其外も、唐土に混ぜべからず、異服異言を禁ずる事、孝經に出たり、吾伯仲二兄ともに、その書たる扇をついに持れず、通俗の書帖を、世にいふから様に書れず、先太父先人以來の家學、けだしかくのごとし。

藩國に仕ふる儒生は、藩中職役の名目などの事をも、甚だ心を付べきぞ、職役の名目は、其君よりいづ、臣として改更すべからず、但し各藩各其法令有るなれば、名目を聞て其職役をば、外人は知らざる事も多し、漢語に譯するとも、只其字義を以て、其職役をいふべし、必其名目にならざる様にすべし。

主君へ披露帖を上るは、直狀は不敬なるによつてといふ事を知らざる人なし、此事を常に心に忘るべからず、庶人の詩文を評する、或は別を送る文などに、またしても王公將相の事などを引用するなどは、不敬甚し、唐土人を眞似たく思ふ心よ

り、右の誤を生ず、唐土にても、草野の人の作は、妄に仰て朝廷の事を援引せず、陶元亮は三公の孫にて、交友中に朝官もあゝかるべけれど、其集を披閱すれば、只一老農のごとし、其脚地坦正なる人はかくのごとし、足を失して輕薄不敬の地にあつる事なかれ。

もと一輕薄の跡先をも考へずしていゝ出せる語の、雅語ともてはやさるゝ事あほし、林君復が鶴も其一ぞ、宋の林君復、西湖に隱居す、鶴二隻を馴養す、常に湖上の寺院に遊て、詩を賦し碁を圍む、其留主へ客來れば、童子これを請じ入れ、籠を開てつるを放つ、鶴の飛を合圖にして、客ある事を知りて家に歸ると、それつるをもつて人を喚ぶ、風雅らしく、其實全く偽ぞ、馴鶴籠を出て歸るはあるべし、然れども鶴神通を具へず、何として君復が行さきを知つて、其上に飛舞せん、君復も何方にありても、片時も脇目せず、虚空を守て居れば、鶴の飛舞を時有ては見はづして、せつかくの合圖相違すべし、詩碁ともにそれに心をよせて、外の事を放下すべきに、一句を哦する中に度々庭へあり、一石を下しては、はしり出て虚空をながめふとせば、詩碁も心に入らず、其苦しさいそがしさ、いわん方なかるべし、君復は楊契玄魏

仲先一等の人にはあらねど、此事は君復夢にも知らぬなるべし、この類の事はなはだ多し。

歷朝の詩話甚だ多し、吾見たるさへすくなからず、然して見るべきは甚少し、十が六七は所謂様に依て胡盧を畫くにて、那移充填し、迂腐版套にて用をなさず、漢魏の古詩をせよ、盛唐の近體を學でこれと化せよ、三百篇を大本とせよなどいふの類ひ、無理にてはなし、然れども未熟の人を教導するには何の詮なし、飢民多しと聞て、なぜに肉糜をくはざるといふに同じ、或は妄りに大言をし、自運は百が一にも反ばず、石虎小堅といふ、諸君は口を以て賊を討といふしに比すべし、教誨の語をなすも、迂遠疎莽にして事實を離る、いふたまでの事ぞ、われ詩話をつくつて、未熟未學の一助にもせんと思ふ事久しけれども、不才多病にして、今に草をだに起さず。

古人の詩を讀に、まづ其全篇に就て、是はわが輩の學得らるゝ體か、學得られざるていかと、其手を起すの難易を考ふべし、詩の佳惡は、其手を起すの難易にはあづからず、たとへば、杜子美詩にても、七言律にて、題、張氏隱居の詩、五言律にて、春夜宴

韋氏莊の詩などは、吾輩の學式にならず、崔氏東山草堂の詩などは、式として學ぶべし、張氏が隱居の詩第五句より始て其人にいゝとよぼす、二十八字中に首尾を合せて、境はなはだ狹し、韋氏莊は、夜宴第一に詩材とする月を起句に落して、情景ともに窮乏す、然るに従容悠然として迫窘ならざるは、杜が詩聖たるゆへぞ、吾輩の企望すべきにあらず、此二詩など所謂手を起すの難きぞ、崔氏東山は、愛爾玉山草堂といゝ出す、餘地甚だ廣し、これは手を起すの易きぞ、學て式とすべし、文章は此事一入多し、左傳史記をよむ時は、殊更是を忘るべからず、右手を起すの難易、一二を擧て其他をよし考べし。

合掌を誡むべし、柳塘春水漫、花塢夕陽遲を、好句なれども合掌すと古人いへり、二聯ともに合掌、又は全篇合掌する、唐土にもまれにはあり、すべて氣を付てつくらざれば、全篇歩行つゞけ、坐しつゞけ、うごきつゞけ、靜つゞけ、或は皆外をいふなど、合掌とも雷同ともいふべし、世にいふ連歌俳諧人など、皆是を吟味す、儒生の詩は卻て不吟味にす。

唐詩の及ばざる所は、只一二字を全篇の樞柱となして、其力を用たる痕を見ず、た

とへば杜詩の風林纖月落風急、天高猿嘯哀、玉少伯が寒雨連江、夜入吳、儲延陵が一
 鴈過連營、許用晦が紅葉青山水急、流など、全篇の精神、全く風の字風の字、寒の字一
 の字急の字にありて、外にかへ用べき字なし、然して其力を用たる痕なし、杜が風
 急の詩は、第三句風に吹れて空中に飛舞する木葉、風少し静まりて地下に下る、第
 四句風吹こみて練のごとく江水に、浪滾々として來る、第三句は耳を主とし目を
 帶て風をいふ、第四句は目を主として耳を帶て風をいふ、錯綜の功を盡して、全く
 痕なし、全篇へはわたらねども、魏玄成が出沒望平原も、出沒の字、平原に連屬せず
 して恰好す、陳伯玉が深山古木平も、右に同じ、李太白が月光欲到長門殿、欲の字生
 にして生を覺えず、輕舟已過萬重山、舟をして山を過しむ、怪にして怪を覺えず、唐
 詩の及ぶべからざる、これ等にても考知るべし。

王摩詰が詩、高華偉麗と、幽玄雅靜と、兩派あり、宋以來其幽玄雅靜を其似るもの形
 似を得て神韻を得ず、其輕薄所謂七子體を作り誤たるに同じ、洗研魚吞墨、煮茶鶴
 避烟、石洞龍嘘氣、松巢鶴隨翎の類是ぞ、ちよと見ては右丞に似たれども、字義を釋
 すれば、沙汰の外にて、埒もなき事ぞ。

李于鱗が詩雷同偏枯に病むとは、時人既に是をいふ、崔駰馬が山池の詩、一樽風雨對江湖、帝壻山莊にての宴會、其豪奢思ふべし、一樽の字にて、句意餓甚し、其上十里芙蓉は上四下三の句、一樽風雨は上二下五とも、上四下三の句ともいはれず、法も正しからず、宗子相を送る絶句、起句に雨中といふ、第三句に落日といふ、よろしからず、雨に日をいふ句は甚多し、杜工部は起句に過雨痕、二句に返照といふ、岑補闕は片雨夕陽を對にす、其外舉て數難し、然れども雨中に落日は恰好せず、たとひ李杜集中に在てもよろしからず、王元美が猶餘廣柳車中淚、誰問陵陽石裡心などは、曠語といふべし、論ずるにも及ばず、凡そ于鱗元美などが詩、加様の類數るに暇あらず、李王詩正誤を撰して、逐一に其誤を正さんと思へど、多病多事にて艸を起さず。

意義本明白なる詩、注解に誤られ、いまだ是正する人なきが、いふし、杜子美曲江對酒の詩、苑外江頭坐、不歸坐して歸らざるは酒に對するを以てぞ、これ既に酒をいふ、是より第四句迄、醉中の情境ぞ、酒量ある才子は、一入早く合點なるべし、李太白越中懷古の詩、越王句踐破、吳歸君臣ともに今迄の阨窮にあらず、義士還家、盡錦衣、

錦衣うるはし、宮女如花滿春殿、宮女うるはし、花のごとくといへば、一入うるはし、
 只今唯有鷓鴣飛、鷓鴣うるはし、蓋し吳を滅し凱旋の時は、錦衣の士、花のごとき宮
 女多かりし、其時は鷓鴣のうるはしきをぞ數ざるべし、千年の後になつては、錦衣
 の士、花のごとき宮女もなく、唯鷓鴣あるのみと、全詩明白なるぞ、鷓鴣毛羽のうる
 はしきは、暖戲平蕪、錦翼齊とつくれるにても、考へしるべし、そのほか諧書におほ
 く出、もとより越鳥なれば、恰好す、此詩を説誤てより、鷓鴣を懐古の詩材とす、笑ふ
 べし、孟遲之が閒情の詩、山上有山歸不得、山上山は出といふ字の謎、夫いてゝ家に
 歸る事を得ず、湘江暮雨鷓鴣飛、鷓鴣は行不得といふの謎、婦行て夫に隨ふ事を得
 ず、離蕪も亦是王孫草、離蕪は當歸のなぞ、王孫草は遊、今不歸の謎、夫まさにかへる
 べしといふて、遊ていまだ歸らず、莫送春香入客衣、離蕪は當歸なれば、其香氣が夫
 の衣中へ入ならば、早く歸らるべけれど、離蕪も王孫草にて、其香氣が夫の衣へ入
 たるによつて、夫が遊て、かへられぬそふなと、右三句に四ツの謎をいふたり、癡想
 の詩ぞ、鷓鴣は行不得と啼といふ事は、唐土人はみなよくしりたる事なれども、そ
 れへ氣がつかずして、説誤は、眉睫に失といふものぞ。

王摩詰が婕妤怨の詩、唐仲言が注誤る、其外唐詩合解の説も甚誤る、全篇明白解し易し、氣をつけて見るべし、いゝのぶるにも及ばず。

李于鱗が友許殿卿いまだ及第せざるとき、其母、殿卿が學業を督勵すること甚し、友來て話談久しければ、學業を妨るとて、他事を以て殿卿を呵る、其人是によつてかへりさる、後には來客を門外にて歸し、門に錠をゑるしてあけり、よつて殿卿は交友甚寡し、右の事は于鱗が作れる許母張大孺人序にいづ、これを本として于鱗が殿卿に寄る絶句の詩を解すれば、意義明白なるぞ、一作山中客、殿卿書を山中によむ、蓬蒿自滿廬、殿卿家にある時さへ過客少し、今殿卿山に在り、留主を訪ふ人なしともいふほどなれば、自然に蓬蒿廬に滿べし、舊游誰獨往、舊時の朋友山中へ往訪尋する者は誰ぞと、蓋し殿卿が舊友、于鱗の外二三人有なしなれば、山中へ獨往して訪尋する者はあるまじ、日夜學業をつとむる外に他事なければ、著作の書多かるべし、全旨、其許山中の客となられしより、舊廬は自然と草ふかくしげるべし、舊遊の中誰人か獨往して訪尋するや、定めて山中へ往訪ふ人は有まじ、さすれば日夜學業をつとめて、著述の書多かるべし、近來は何といふ書を著はされしやと、

全旨此とほりぞ、獨往は此所では只往訪ふ義ぞ、杜詩に春山無_レ友獨相求といふに
あなじ。

李于鱗、順徳の知府たりし時、王元美が讞獄使となつて、順徳へゆきしに會面して、
元美に寄たる詩、山色秋傳使者輶、時節をいふなれども、讞獄は冤枉を雪伸するを
本とし、訟獄をも處決すれば、湊合してよし、輶は韻を趁ふのみ、孤城何處不蕭條、孤
城は順徳をいふ、于鱗知府なれば、支配の村邑多けれども、いづれも困窮して蕭條
たり、蕭條の二字上に應じて秋といふて、本意は下に應ず、請看襄子宮前水、依_レ舊_レ東
流、豫讓橋ともに順徳に在り、趙襄子豫讓は仇敵ぞ、水も人のごとく意地を立るも
のならば、襄子宮邊の水は、豫讓橋と名の付てある橋の下をば流れまじけれど、水
は私なし、豫讓橋と名づけてありても無ても、それにかまはず、只行べきすぢを流
るゝといふ、蓋し讞獄使は勢要にて、甚威焰有る職ぞ、冤枉を雪伸するといふは表
向にて、其實は賄賂を取て卻て訟獄の冤枉を生ずる人おほし、元美は左様な人に
てはなけれども、于鱗は益友の義をもつて、是を諷誡せり、順徳、支はい下の村邑困
窮せざるなし、元美今勢要の職を蒙らる、必賄賂を取て正理を曲らるゝな、訟獄の

正眞なる事、猶、襄子宮前の水が、豫讓橋下を流るゝごとく、意地もなく只正路をゆかるべし

明光起草は杜詩にあり、于鱗も用ゆ、明光宮に起草する故事、隨に有り、于鱗は趙戸部出守、淮陽の詩、第一句は趙氏進士より出身せしをいふ、出身の途多けれど、進士より出身するを手柄とす、其人文才有をいふ、第二句戸部郎は要職にて、平日も多用なるに、軍旅あれば一入ぞ、それを多年勤め來たるをいふて、其人吏才あるをいふ、第三句新任なれば其地の政理を練習せざるをいふ、第四句錢穀其外多端の要職を、今迄滞りなくつとめ來て、本部の尙書は勿論、其外都察院通政使司のさつとをもうけず、其章奏に連署さして來たる人なれば、郡牧の職は物の數ならずと、三句へ歸ていふ、第五句は公の勤むべき事に怠らぬをいふ、第六句は私の娛樂を事とせぬをいふ、つとむべきことには、雨天ともいはず他出し、花盛の時然も晴天にても、用なければ在宅す、夕陽にて晴天をいふ、對夕陽にて終日在宅して、賓客宴會せざるをいふ、第七句は六句を承け、第八句は七句をうけ、在宅手透の時吾を憶はるゝならば、書狀を寄られよといふたぞ、行車臥閣の一聯、于鱗には珍敷手強くつ

くもりたり、排比鋪陳して妄に仰山にいふを強しとするは、猶大人鬼臉を裝して、小兒に向ふがごとし、吾所謂ほし蕪ほし大こん煎餅は、右にても考思ふべし。

訓點に心を用べきは、既に前にいゝし通りぞ、されば杜子美が萬國尙戎馬、故園今如何、昔歸相識少、早已戰場多、意義是にて明白にて、注するに及ばず、後出塞の詩に、部伍各見招、招は招旗又は招ともいふ、唐土の兵書に多くあり、吾國にては馬印にもまとひにも比すべし、平沙に幕を張て陣とす、一隊々々の士卒、各其隊將の招旗を目印に陣屋へ入るをいふ、吾國も唐土も陣中は物音せぬを尙ぶ、庸將の陣營は何としても物騒し、號令正しく、陣營寂然たるを譽て、漢の霍嫖姚にてはなきかといふたるぞ、千萬の人が陣屋へ入とて、手招きするならば、見付らるゝものにてはなかるべし、普請場其外法會など、凡そ人二三百も寄たる場所の事にて考思ふべし、手招して聞付ずば、聲を立て、呼べし其騒しきいふばかりなかるべし。

崔可動が長干行に、君家住何處、妾住在橫塘、停船暫借問、或恐是同鄉、意義是にて明白なるぞ、君家はこゝにては猶君者といふにかなじ、何方の誰ともしらぬ人の、舟にて通行する、其家を聞得て何にせん、外にいゝよるべきことなきによつて、こな

たは何方に住せらるゝやといふていゝより、本意其人をわが方へ誘引するにあ
り、繁華なる宿驛舟著倡女などあるところは、一入さあるべし。

韋左司が幽居の詩、微雨夜來過、不知春草生、不知春草生と訓點する誤ぞ、家内にて
夜雨を聽て、野外庭中などに草が生ずるを知るは、聖人にてならせられぬこと
ぞ、不知は定知といふにあなじ、作例多きはいふまでもなし、夜雨を聽、それによつ
て、草がはへるで有ふと思ふ、甚無用の事をおもふ、これ隱者の胸中にて、此一句が
全篇の柱になる、是等にては、訓點の得失をかんがふべし。

先生といふは儒生の通稱、勿論なるを、六七十年前迄は、わが師範の外は、徳業甚高
き人ならでは、先生とはいはざりし、本義には合ざれども、其時節の儒風、律義なる
慕ふべし、今日にては、ばさうの唱曲を教る者も、其徒是を先生と稱す。

凡そ輕薄の稱號、舉措ともに、古へよりなきにはあらねど、李唐より猝に盛になつ
て、洪水の天に滔るがごとし、子孫追尊の典禮の外に、皇帝を以て贈官とするに至
る、其他はいふにも及ばず、尊號といふことも、唐朝より始る、暴君庸主にも、文武仁
孝などの美號を疊加せざるはなし、臣子よりいへば、それはまだ一理あり、あらは

に弑逆をなすの悪人も、亦是を舉行ふ、其にくむべきはいふ迄もなし、笑ふべく怪むべきも亦甚し、五代戦争の時に至ても、此風卻てはなはだし、通鑑に此類甚多し、今其一ツを節略してこゝに記す、以て其餘を推し考ふべし、是皆其時の文官どもの所爲なるぞ、資治通鑑五代晉紀、閩、拱宸都使、揮使、朱文進、閩門使、連重遇、相與結、昏、以、自固、李后使、入告二人曰、主上殊不平於二公、奈何、會后、父李真有病、乙酉、曦如真第、問疾、文進重遇使拱宸馬步使錢達、弑曦於馬上、召百官集朝堂、告之曰、太祖昭武皇帝先啓閩國、今子孫淫虐荒墜、厥緒天厭、王氏宜更擇有德者立之、衆莫敢言、重遇乃推文進升殿、被袞冕、帥群臣北面再拜稱臣、文進自稱閩主、悉收王氏宗族、延喜以下少長五十餘人皆弑之、葬閩主曦、諡曰睿、文廣武明聖元德隆道大孝皇帝、廟號景宗、是等は其惡逆はいふまでもなし、輕薄とも奇怪とも、いふに言葉なし、上より輕はくをもつて下をひきゆる、世習のけいはくに専なる、怪むに足らず。

明人口ぐせに宋人をそしれど、明人の輕薄は、宋人に十倍す、宋の世風律義なるによつて、國勢弱けれども、始終人心離れず、明は永樂に人心一たびはなれ、神宗立太子の取扱よろしからざるによつて、萬曆の中比より、天下の人自然と二ツになつ

て、天啓にいたつて人心大に離る、元の宋を滅す、宋人を捕にしても殺さず、清の明を滅す、明人を捕にしては殺す、程臨桂をして宋末にいでしめば、たとひ節に死するも、必三年の日月を経む、文信國をして明末にいでしめば、即死を免かれじ、元清の二世祖ともに明主なるに、其仕方の大に替るは、一は中國人の心服すると服せざるとを、よく考へての事なるべし、清朝の政道宜しけれど、清儒の輕薄は明儒よりも甚し。

康熙帝は聖人の道を尊敬したまひ、藝文にも心を寄せ、書籍どもを纂撰せしめ給ふ、明主といふべし、然れども、西湖十景に、各御筆の額を書き、其外諸臣に毎度御筆の書を賜ふ、是中國はもとより文國なるを、塞外より入てこれを理めたもふをもつて、臣民の心を信服せしむる爲にしたまふ機謀なるべけれど、其本意を推量せず、其仕方を以ていはゞ、輕薄なる事といふべし、清人のけいはく、一は右にもよるなるべし。

里談巷話の書、常套を脱して一層の新奇をなさんとせしは、皆輕薄にして且陳腐を覺ゆ、たとへば舟行風に逢ふて、はからずも仙家へ行、數年を過し故郷に歸る、定

て數百年にも成るべしと思へば、其郷里も其家も、昔に少しもかはらず、内へ入れば、其家人其人死せりと思ひて、僧を請じ、今日過七の弔ひをなすに會ふといふの類、故事を一轉して、作者は定て新奇と思ふべけれど、輕薄にして卻て陳腐となる、伯氏嘗ていふ、萬の事器物なども、有ふれたるは宜し、新奇をつくりいだせるは、ほどなく古し、扇、烟草入など、尤心を付べしと。

幼少にして才發器用なる人、生長して劣れる多しといふこと、裝求にもいづ、儒を業とする人の外は、四民各其家業をつとめ、不行跡さへなくば、訓點なき書を讀て、詩文章をよくせずと足りぬべし、十歳未滿なる童に、其父督課して、詩を誦せしめ、訓點なき書を讀習はさしめ、神童奇童など、人に譽させるはよろしからず、其子十五六歳にもなつて、藝文を好み嗜ざれば、たとひ其家業をよくつとめ、不行跡になくても、何となく劣りて思はるゝものは、はじめの譽望、卻て後の妨となるにちかし、然れども幼少にて、才發器用にして、生長して彌なるも、吾國唐土にもひかしより亦甚多し、明の李賓之は十歳より内にて及第し、生長して學才官路ともに達す、程克勤、何景明なども、生長して彌上達す、一等には論ずべからず、吾友伯恭仲達

なども、生長して彌上達す、伯恭唐土の事における、仲達吾國のことにおける、彌よくつとめてけいはくならず、其才其名、世人の知る處なれば、こゝに詳にせず、又わが好む所に阿るにあらざるを、辨ずるにまよはず。

或人のいはく、今日にては、優戯をなす者どもと表號あり、少年輩など稠人廣坐の中にても、優戯者を表號を以ていふ人あり、優戯の事を悉くしり、田舎人にあらざるといふを、自負するにてぞあるべし、優戯の事をよく知たる、恥とせずして譽れとあもふは、笑ふべしと、われ是を聞て、且笑ひ且嘆く、明人の所謂守愚、冰壺、老人珍しからず、北地、信陽、濟南、吳郡、場所をも擇まず、いつもこれを口にし、筆にす、其心猶優戯者の表號をいふがごとし。

釋迦は外道を破るが爲に、外道の術を學ばれたりとかや、朱文公學術も右に同じ、人の誤を正さんと思ふものは、此心得あるべし。

几上に訓點付ざる穆天子傳有て、訓點付たる左傳史記未讀事ならぬ人有りといはゞ、いふ人が刻薄輕薄に聞ゆべけれど、實にさいふとほりなる人多し、仲氏、細流を擇ばず、其海量をもつて藝文に主盟し、廣く生徒を教授せらる、仲氏身健に量廣

ければ、授業の煩曠は、もとより期して疲倦なけれど、時々餘り甚しきことに逢ては、擡眉してわれに語らる、わが思ひよらぬ笑ふべき事ども多し、元人の所謂道を尊ぶし道を廣るは、伯仲二兄の任ぞ、君恩の辱じけなきは、いふまでもなし、父祖の餘蔭、二兄の賜、讀書の樂、われ穩に是を領ず、幸甚しきといふべし。

今人は四五卷の書を撰しても、自言の相違多し、朱文公撰述の諸書、等身にも過たるべけれど、自言の相違なく、其相應する事、常山の蛇勢に比す、其行文も亦是に、なじ、見識は人々各具在す、其上智者も千慮に一失といへば、先達にも誤なしとはいふべからず、議論の際は、先達に譲らざることどもあるべし、何にしても古人は物事あつし。

詩文を學ぶには、先、自他の材力を考て、後に手を下すべし、世諺にいふ、鴉が鷓鴣の眞似をするといふ、誘を蒙るべからず、文章の題品、歐陽永叔は韓退之に劣り、退之は司馬子長に劣れるは、いふまでもなし、然れども、退之の子長を學ばれたるよりは、永叔の退之を學ばれたるが、學び方甚よろし、宋景濂が永叔に於けるは、所謂具體而微なるぞ、其上議論中に主とする所なく、輕薄いふ許なし、唐應徳は又一段劣

りたれども、其人は景濂が及ぶ所に非ず。

書牘の上包の真中に、幅一寸計の朱紙を簽にして、正の字をかくこと、燕京にて専せし事にてありし、數年過て燕京へ行しに、一同に此事なし、人に問たれば、張闕老が名を憚てかゝらずといへるにて興醒たりと、王元美記し置ぬ、大功を立、震主の威勢ある大臣、敬すべき事なるさへ、かくいふ人あり、同等の人に、意をうけ風を希ひ、人品才學をも、本人に黑白違ふ議論をなし、華墨を汚穢し、臭を後に傳ふるは、甚戒むべし、藝文の力を邪路に用ひ、わが非を飾り人の是を蔽ふ事、學ばざる人よりも功者ならば、道を貫くの器をもつて、みちを妨ぐといふべし。

凡そ詩文ともに忠孝にはづれたるは、なにほど上手にても見るに足らず、文は道をつらぬくの器といふ事を、くれぐれ忘るべからず、詩文の風は各其好みに従ふべし、なに風にても、誰の體にても、意義溫雅醇正なるを尙ぶ、刻薄けいはくなるべからず、又内に主とする所なく、漫然として弊風俗習に混ぜべからず、尤新奇を工夫し、妄りに高遠に馳すべからず、仲尼は、ばなはだしき事をなさざる人と孟子いはれし、聖人の言行中正ならずといふことなし、聖人の徳ひたすら仰ぎ尊ぶべし。

藝苑談終

藝苑談

伊賀 備前 平安 姪

西澤 高 勝 伊藤 藤

梶 潤 龍 望 訓

校 梓 書

孔雀樓筆記抄 附録

清田 絢 著

梁蛻巖屈景山ノ二先生、譽望世ニ高キハ、イフマデモナシ、コノ二先生萬人ニ勝レタル徳アリ、マケヲシミトイフコト、我ヲ立ルトイフコト、オヲ妬ミ己ニ勝ル人ヲ排スルトイフコト、襟ニ附クトイフコトナド、露バカリモナシ、後輩末學ノ詩文ヲミルトテモ、必ズ心ヲ潛メテコレヲ讀ムコト二三遍ス、此等ノコトハ元ヨリ儒者分上ノコトナレドモ、コレヲナス人ハ甚少シ。卷一

蛻巖先生自書ノ寒月ノ詩、伯氏ノ方ニアリ、細竹馴危臥、喬林羈鳥驚ノ句アリ、數年後ニ集版ナル、喬林ヲ喬柯ニ作ル、意義俱ニ勝ル、七十ノ老翁ナヲ藝文ニ心ヲ潛メ、一字モ苟モセラレザルコト、コレニテモ推テ知ベシ、眞ノ風流トモ、雅人トモイフベシ。

藤紙ハ舊作ノ詩文ヲカキ、新作ニテモ人ト贈答唱和スルニアラザルハ、書テモ苦

シカラズ、贈答唱和ノ作ヲ藤紙ニカ、バ、全幅ノ紙ニ地ヲシテ書ベシ、生紙ナギハ唐土ニテ凶禮ニ用ユ、韓文公生紙ニ舊作ヲ書テ人ニ見セラル、ニ、其無禮ヲイ、譯セラレシ書牘アリ、吾國ニテトウシヲ公オホキヤノコト式正ノコト要用ノコトニ用ヒズ、タハ詩文ナドヲ書ニ用ユ、ソノ詩文唐土ニテ生紙ヲ用ヒザレバ、生紙ハ決シテ用ユマシキコトゾ、生紙ノシカモ片紙ニ、壽詩賀文ナドヲ書コトマス、僻事ナルベシ、凡ソ世人何程ナレ親キ友ナルトモ、婚嫁ソノ外式正ノ書狀ハ、奉書ニテモ、杉原ニテモ、全紙ニタテ文ニテカク、遠境ヘ遣スニハ、横折ニシテ書ドモ、全紙ヲ用ユ、片紙ニハカ、ズ、シカルニ詩文ハ千秋ノ業不朽ノ盛事ナド、云犖、生紙ノシカモ片紙ヲ用ユルハ、僻事ニアラズヤ、帛ハ一匹半匹ノ帛ニ、絶句ナド書アハタル、モノニテナシ、タチテ用ルモヒガ事ニアラズ、紙ハ決シテ全紙ヲ用フベシ、サレバトテ全幅ノ藤紙ヲ常ニ用ヒバ、事仰山ニシテ、シカモ我詩文ワガ書字ヲ自贊スルノ嫌アリ、吾國ノ紙ヲ用ユベシ、況ンヤ吾國ノ紙、萬國ニスグレテ上品ナルヤ、コレラスナ、外國ノ紙ヲ用ユルハ、決シテヒガコト、云ベシ、卷ニ

詩ヲ書ニハ、上品ノ奉書ニ布目ヲ打テ、紙ノ四周ニ二三分ホド金ヲウツテ用ユ、甚

宜シ、上品ノ美濃紙ニ雲母ヲヒキタルモヨシ、價ノ貴キ品ヲイハハ、貫之紙、行成紙、最ヨロシ、北地ノ五色鳥、子、五色奉書ナド精妙甚シ、然レドモコレハ進奉ノ外ニハ人間へ落ズ、金錢ヲ以テ得ベキニアラズ、大鷹中鷹ナドハ、且紙ト云テ、貴賤ニ通ジテ用ユ、今ハオホクハ貴者ノ料トナル、詩ヲカクニハ行成ヨリ貫之マス、宜シ、コノ二品ハ價貴クシテ、貧儒ノ常用スベキモノニ非ズ、奉書ニ布目ヲ打タル、美濃ガミニ雲母引キタルナドヲ常用スベシ、西ノ内ト云紙アリ、コレヲ水打ニスルカ、又ハ雲母引タルヲ用レバ、コレ亦清雅甚シ。

人ニ詩文ナド乞フハ帛ヲ用フベシ、寸尺ニヨリ貫之行成ノ紙ヲ用ルヨリ、費ヲ省クコトアリ、ヨシソレハトモアレ、人ニ求ムルニハ、必ズ帛ヲ用ユベシ、コレハ甚譯アルゾ、大旨ヲイハハ、子孫ヲシテ祖先ニ負カザラシムルニアリ。

老杜ガ詩聖ナルハイフマデモナシ、ソノ全集ヲアゲテ論ゼバ、彭衙行、羌村、最モ神品トス、十九首以後ノ諸人ノ詩幾千萬首ノ總擅場、諸體ノ總擅場トモイフベシ、凡ソ五言古詩ハ、老杜ガ外ハ王右丞、褚延陵、柳儀曹、孟東野スグレタリ、五言律詩ハ諸家ニ佳作多シ、七言律ノ總擅場ハ王摩詰ガ雨中春望ト、溫泉寓目ノ二首ナルベシ、

七言絶句ノ總攬場ハ、王少伯ガ西宮春怨ナルベシ、五言絶句ハ、王摩詰ノ外、ナラズベキ人ナシ、七言古詩ハ作ラズトモアリナン、唐土人モ能品ノ上ニ出ル七言古詩ナシ、牛鬼蛇神ノ一派ハ、宋ノ謝阜羽、明ノ徐文長モ、トキニコレヲナス、畢竟ハナハダシヨキモノゾ、甚スマジキコトゾ。卷四

晚唐ノ詩人ハ、許用晦ヲ第一トスベシ、婉美ニシテ風雅ヲ失セズ、勞歌一曲ノ絶句ハ、王少伯ガ集中ヘモ入ルベシ、劉蘊靈コレニ次グ、李羲山杜牧之ニ至テ、詩ノ惡道極ル、予ガ選スル所ノ唐詩府ニ、羲山ニ於テ君問歸期ノ一絶句、牧之ニ於テ溶々漾々ノ一絶句ヲトルノミ、李于鱗ガ擬古樂府、摸擬ニスギテ、イトフベキコトイフマデモナシ、ソレサヘ、ソノ獨漉篇ハ本人ノ寓意ヲ味フルニタル、服子遷ノ獨漉篇、寓意婉美ナルコト、于鱗ニ勝ル、ア、痛癢ヲシラズ樂府ヲ作ル人ハ、何ゾカゾフルニタランヤ。

服子遷ノ詩、二編ヨリスデニヨロシ、三編四編ニ至テ、益々ヨロシ、只ソノ小督詞ニ、御史中丞臣仲國ノ句アリ、コレハ氣付カズシテ作ラレタルニテアルベシ、誤甚シ、御史ハ吾國唐土トモニ、執法ノ職ニテ、人ノヲソレハバカルモノゾ、唐土ニテ御史

臺ニ大夫ヲオカズ、中丞ヲ長官トセシ時モアリ、唐土人ヲシテコレヲ見セシメバ、大ニ怪笑スベシ、天子自ラ執法ノ貴臣ヲシテ、匹馬夜行シテ、逋亡ノ妻ヲ尋搜セシム、コハソモイカナルコトゾヤト云ベシ、仲國ガ稱號、禪正大弼ニテ、幸ニ四字ナレバ、ソノ儘ニ用ユベシ、唐土人コレヲ見バ、禪正大弼ハ吾國ノ官名、定テ近習カ期門ノタグヒナルベシト云テ、コトスムベシ、仲國ハ北面、禪正大弼ハ、コノ時ステニ散號ニテ、見職ニ非ズ、北面ノ士ヲシテ尋搜セシメ玉フ、サシテ不思議ナルコトモナシ、御史中丞ト云ヘバ、タトヒ唐土人ニテナクトモ、先ヅ大ニ聞ヲラド、ロカス、當時侯藩ニテモ、目付役ハ人ノヲソレ憚ルコトゾ、侯第ノ使女出奔スルコトアラシニ、目付役ヲシテコレヲツレニヤラルベキヤ、白石南郭諸先生ノ集ハ、長崎へ來ル清賈及ビ朝鮮人モ買歸ルト云ヘリ。

李崆峒、人品氣節、ソノ文ニマサルコト數倍ス、宗子相モ亦シカリ、文衡山人品ソノ詩ニマサル、詩ハソノ書ニマサル、唐伯虎ガ放蕩ハ、激スル所アリテゾ、祝希哲ハ、賦性シカリ、詩ハ伯虎ヨリ宜シ。

詩ノ合掌對ト云フ、心得遠ル人アリ、コレ等ノ類ヲ了悟スルノハヤキハ、端文仲

ナルベシ。

七八年前暮春ニ、皆川伯恭ト東山ニ春ヲ探ル、道スガラ連句シテ、七言律ヲ賦ス、第一首ノ一二五六ヲ伯恭、三四七八ハ予、第二首ハフリカヘテ作ル、カクノゴトク參互輪換ノ、黄昏歸宅スルマデニ、七言律十二首ヲ得タリ、コノトキ祇園邊ナド處々ニ、世ニイフ開帳ナルモノ多シ、我輩ハ詩魔ノタメニナブラル、ニヨリテ、門ヲイヅルヨリ、擇ミテ僻淨ノ路ヲユキ、熱鬧ノ場ヲサク、從僕輩怪笑セシニテアルベシ。

右は清田翁の譜談兩書を讀むもの、爲めにその孔雀樓筆記中より詩話に關するものを抄出して此に附録とせしなり、編者識す。

附錄 畢